

昭和二十四年三月二十八日運輸省特例掛本誌雑誌第六二七号
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
平成十七年五月一日発行(第百八巻第五号)

ホトトギス

五月号



俳句随想

二百七十五

汀子

いよいよこの五月からホトトギスの「天地有情」欄が始まる。皆さんはどのような句を投句しようかと悩んでおられるかも知れない。参考までに私の考える「天地有情」の句を一句挙げておこうと思う。

春来れば路傍の石も光あり 虚子

この句は春酣の春光の麗らかさを詠んでいる。路傍の石も光を返して光っているというのが本意であろうが、石そのものがよろこんで光を放っていると読むこともできる。

虚子の俳句をよく読むと、世界の全てのものが生命を持ち感情を持っているという天地有情の見方が根底にあることが分る。それは石でさえ例外ではないのである。

先月と同じことを書きますが、天地万物が本来有情であるからこそ自然の一部である我々人間もまた有情なのだ。お互い同じ宇宙の生命を分け持っているのである。私達は自然の中に、自分自身と同じ生命を発見し、生命の美しさと輝きを讚美し、感動を込めて喜び合うのである。「天地有情」の俳句とは花鳥諷詠の俳句に他ならない。

旬日記

汀子

平成十六年五月二日 関西野分会

飛火野を褥としたりたる袋角
まだ吠くを間近に活けて桐の花
剪り取りし桐の大樹の花抱きて
これよりの旅多きこと桐の花
五月二日 下萌旬会
蛙跳ぶへしツドライイトの道となる
咲き終へしもの移りつゝ春の行く
風に乗るもの乗らぬもの皆柳絮
水面より出て目が動く蛙かな
五月三日 芦屋ホトトギス会
懸り藤仰ぐ高さに香を零す
形見なる母の袷を着ることに
風心地よき旅路あり夏近し
五月四日 ロイヤル吟行会
雨に洗はれしみどりに包まるる
半分は雨に色消し芝桜
どの道を迷ふも雨の新樹かな
峡抜けて若葉明りを抜けてをり
五月八日 四国ホトトギス同人会
旅薄暑別行動といふ自由
近道は明石大橋夏の潮
着迷ふも楽しみ初夏の旅衣
夏風邪へ持ち越して又旅にあり
新緑の奈落をカーブ又カーブ
五月九日 四国ホトトギス俳句大会
マロニエの花の仔細を見とどけし
太平洋見て来し卯浪荒るる日に
邂逅のことばも薔薇の雨に濡れ
五月十一日 大阪倶楽部
かけがへのなき初夏の日を旅にあり

筍の一日の丈を仰ぎけり
下り立てば若葉の庭となつてみし
雨止んで筍伸びてをりをりけり
抜けて行く麦秋の野をまつ直に
本復の人に五月の花溢れ
五月十一日 綿業倶楽部
新緑に染まけて雨の旅路かな
椎若葉抜けて太平洋の風
吹かるるもそぞろに初夏の旅衣
雨も又薔薇の旅路輝かす
五月十三日 清交社
牡丹に雨容赦なき日なりけり
邂逅や牡丹一片づつほぐれ
牡丹の色を明かしてゆく薔薇
夏めくや身軽な旅となりけり
牡丹の庭に又出て目を休め
五月十四日 工業倶楽部
降りさうに卯月曇のまま暮るる
仕事とも遊びとも旅卯月かな
明日あることを約せし夕牡丹
夜は睡る牡丹に明日のありけり
五月十六日 北近畿ホトトギス俳句大会
軽暖の雨に濡るるをいとはずに
五月十八日 有恒倶楽部
松若葉少し木洩日零すほど
庭蟬と聞き風波に包まるる
迷ひたるより軽暖の旅路かな
棘外したる薔薇を抱き訪ふことに
五月十八日 無名会
立ち止まりては人堰きて薔薇を見る
更衣しては軽々と現はれし
悼む日の薔薇の明るさふさはしく
埜域に捧ぐ薔薇とて純白に
似たやうな日々過ぎゆけり更衣

雨の日の一日延ばしに更衣
五月十九日 夏潮旬会
皮脱ぐぬ先はや遣し今年竹
庭歩か傘通りませ若葉雨
雨憂しとせず香水を先立てて
朴の香に閉ぢ込められし思ひあり
眼前に活けし朴の香少し倦む
五月二十日 クラブ合同
一枚の麦秋の野に降り立ちし
麦秋の野の果つところ海展け
五月二十日 川口辰子様の墓 平成十四年二月十日迄
薔薇捧げそこに在せる如くにも
思ひ出を繙きをれば夏の蝶
里山に眠りて夏の蝶となる
五月二十六日 祝 黒田充女様旬碑
風薫る旅の思ひ出繙かん
五月二十七日 きさらぎ会
一口をふみ新茶でありしかな
旅多きことも卯の花腐しかな
五月二十八日 時雨旬会
着古せしセルとて母の形見かな
好みとはいへど又そのセルを着て
手放せぬセルの思ひ出着る出先
こんなにも活けて重たき朴の花
散らぬとも散るとも風の朴の花
近々と見るここのなき朴の花
五月二十九日 旬会と講演の会
何か飛び来しが天道虫となる
登りつめ天道虫の变身す
この辺の道は迷はず花水木
天道虫或ひは天道虫だまし
五月三十日 野分会
運転の視野を過りぬ桐の花
天辺を見せ峽深き桐の花
袋角群を離れず離れけり

廣太郎句帳

廣太郎

五月十五、十六日 北近畿ホトギス大会

日本語といふ美しきもの業平忌

キリシタン灯籠に汗をさめけり

五月雨傘二人で一つてふ雅

五月十八日 草木瓜会

境内といふ苗売の天地かな

袋掛親しき増せる稲城かな

子規庵は近くて遠し糸瓜苗

牡丹の底より暮れてゆきにけり

君の為五月雨傘を選びたる

牡丹の寺ぼうたんの庭繋ぐ

五月二十六日 目黒学園句会

平成十六年五月六日 蕉心会

袋掛稲城の風を知り尽し空を恋ふ色に蚕豆立ち上る

大川の水雄弁に夏来る

山並を丸くをさめて里若葉

船音のマズルカめきて夏に入る

食卓にどかと蚕豆置かれあり

下町に夏場所前の静寂あり

五月二十日 登高会

その中に命鎮めて谷若葉

心まで更衣せし佳人かな

大川の風夏場所を知らせくる山気とも靈気とも若葉風かな

固まつて蛙になる日待つてをり

菖蒲の香日の本に神多かりし

五月二十六日 三番町句会

大川の水の分子に夏来る

薔薇咲いて僕の庭明るくなりぬ

更衣ピンクに映える紳士かな

夏場所や日出づる国の力士減り

麦飯やつくづく瑞穂国平和

新緑に紫煙吸はれてゆきにけり

五月二十三日 虚子記念文学館投句

朴の花舌のごとくに落ちにけり

五月十三日 土筆会

茂りたる桂に館の騒きかな

五月二十八日 時雨会

丸ビルを輝かせたる新樹晴

五月二十三日 黒田充女様句碑除幕祝句

朴の花福知山線拓けゆく

吉野山余花に賑ひ戻りけり

悉く麦秋を統べ句碑生るセルを着て昔芸妓でありしかな

園新樹風の悪戯ありにけり

五月二十五日 若水会

雑詠

廣太郎 選

冬の月円かどこまでも正面 大阪 佐土井智津子
 アラジンのランプのやうな灯火親し 同
 青写真大きな日向ありにけり 同
 一言に全身ゆるめ 初笑 東京 橋本くに彦
 相槌の言葉にならず 初笑 同
 全員を立ち止まらせて 初笑 同
 ジェット機の飛ぶ空の下初不動 東村山 村松紅花
 向けられしカメラに笑まひ寒牡丹 同
 枯木影這ひ登りある 枯木かな 同
 冬日落つより電飾の街となる 龍ヶ崎 今橋眞理子
 日光に月光に 枯尾花かな 同
 冬座敷座れば見ゆる 隅田川 同
 聖樹の灯とは点くときが消ゆるとき 神戸 木村淳一郎
 神に決められし高さに鷹舞へる 同
 黒足袋の裏懸命に白かりし 同
 冬濤といへず冬怒濤ともいへず 東京 坊城俊樹
 囲炉裏には美しき人俯けり 同
 女らは寄り添うてみるとんだかな 同

初詣終へて車は富士へ駆る 熱海 嶋田一步
 初富士の白の新鮮仰ぎけり 同
 初鴉富士の白さをとびゆける 同
 誰云ふとなく初富士へ行く支度 同 嶋田摩耶子
 手摺とは労りの棒梅の園 同
 がつちりと葉の受けとめて花八つ手 同
 さんざめくとは花と花人と花 榎原 稲岡 長
 幹のみの桜となりて闇深し 同
 白木蓮白し花弁も花翳も 同
 梅雨に入ること心の遅れぬし 福山 竹下陶子
 蛇重さ消し向日葵の葉をわたる 同
 名月となるべき光名月に 同
 野の闇のひそと動きて霜生るる 神戸 長山あや
 石の下草の根方の霜の声 同
 霜の朝地はきらめきて息を吐く 同
 オーロラに凍星ゆらぎはじめけり 同 千原叡子
 オーロラの音無き楽や耳袋 同
 冬帝にオーロラは彩拡げ舞ふ 同
 銀杏散り尽し天守は空にあり 高槻 会田仁子
 大銀杏散り引算の空残る 同
 城見上ぐ冬木一本づつに人 同
 天日に丈をなしゆくどんどの火 八代 山下しげ人
 初日乗せたる濤音のひびきあふ 同
 的を射る音の他なし弓始 同

雑詠句評（四月号より）

弘子・仁義・昭代

純也・雅　・比奈夫

基子・暮潮・一步

小木菟・汀子

オリオンの存問受けて枯尾花 東京 稲畑廣太郎

葉も穂もすっかり枯れつくした芒「枯尾花」にはもう風もそっけなく過ぎる。風も絶えた夜、全てをそぎ落とした枯芒は放下したように星空へ伸びをする。夜空から冴え冴えとした星明りが降り注ぐ。冬の夜空にひとときわ明るのがオリオン星座。遙かな光年の世界から枯尾花に届く星の言葉。大いなる時空の中で交信しあう星と枯尾花。それは作者の心に届いた宇宙の言葉なのである。中七の「存問受けて」の措辞は、まさに「天地有情」を受け止めているのだ。ホトトギス雑詠の新選者としての気迫のただようスケールの大きな作品である。（弘子）

芒の一年は芽立に始まり枯れて刈られる迄の経過の中に明暗ある変化の姿を見せてくれる。尾花の華麗な姿、絮を飛ばし終えた枯尾花はもう風には靡かない。夜空のオリオンの存問とは妙。

（汀子）

シリウスの触れんばかりに雪の富士 吹田 宮崎 正

シリウスは、冬空に輝く最も明るい恒星。そのシリウスが、雪の富士に触れんばかりに輝いていた。作者は、シリウスの輝きに雪の富士が応じている光景に、並々ならぬ美しさを見出したのである。作者に与えられた大きな感動が、そのまま飾り気もなく句として吐露されている。そしてその大きな感動が、読む人によく伝わってくる。（仁義）

シリウスは冬の夜空に大きく輝いて、その存在に気がついた作者。それは雪の富士山に触れんばかりであり、それがシリウスと知るまでの夜空への興味までが想像される句。（汀子）

（以下略）

天地有情

金子選

花鳥諷詠 天地有情 去年今年 豊中 滝 青佳

初春に情あり我は抱かれん 同

話しつつつ心寒紅梅にあり 東京 今井千鶴子

覚めてゐる我に我が家に霜夜更け 同

人里に下りて行かねばならぬ熊 京都 安原 葉

白濤の上冬帝のとばす雲 同

片時雨月に押されてをりにけり 東京 稲畑廣太郎

京といふ時雨の香りありにけり 同

冬滝の微塵となりて落ちにけり 同 坊城俊樹

冬滝の真正面なる僧ひとり 同

羽子突いてゐる駄菓子屋の路地の奥 神戸 三村純也

女正月せずとも娘天下かな 同

白で来し綿虫青にvari消ゆ 同 後藤比奈夫

あめんぼう水が柔かすぎる日も 同

人生に道草いくつ漱石忌 同 山田弘子

眠りたる山に凭るるやうに住む 同

誘はれて妻の機嫌や二の替 榎原 稲岡 長

二上に薄き雲あり春立つ日 同

咲満ちて花の威圧と云へるもの 金沢 藤浦昭代

春煖炉焚き白山へ開く窓 同

傾ける日が大綿の惜しみとぶ 河内長野 吉年虹二

小春日の落ち三日月を残したる 同

己が眼を確と見据ゑし初鏡 吹田 宮崎 正

この年の終のもみぢの溪深し 同

冬の海見つゝ急がぬ旅なれば 福岡 松尾緑富

冬晴の島見え隠れ車駆る 同

虚子の道ひたすら辿り去年今年 龍野 浅井青陽子

感動のこゝろ素直に去年今年 同

天に枯枝地に枯枝影にぎやかに 東村山 村松紅花

地震 大津波地球の寒々と 同

凜々と月あり一会うつくしき 熊本 岩岡中正

会へばたちまち秋灯下の句会 同

蕎麦屋にもポインセチアの似合ふ頃 相模原 木村享史

熊穴に入りしか余震もうなきか 同

秋の暮そこひ癒えたる眼に蒼し 徳島 上崎暮潮

紫は 雨 匂 ぶ 色 思 草 同

天地有情句評

汀子

花鳥諷詠 天地有情 去年今年 豊中滝 青佳

人間も自然の一部と見る全ての命への讃歌。根底には天地有情としての見方がある。即ち花鳥諷詠詩である俳句を貫く作者の去年今年。

覚めてゐる我に我が家に霜夜更け 東京 今井千鶴子

しんしんと霜の降りてゆく気配が濠つて行く夜。机に向かう作者の身辺が冷えてくる。霜に我が家全体が包まれて行く。

人里に下りて行かねばならぬ熊 京都 安原 葉

山に熊の越冬するための木の実は日本列島を吹き荒らした台風に落とされた。人里へ下りて行かねばならない熊の事情を考える作者。

片時雨月に押されてをりにけり 東京 稲畑廣太郎

夜空を照らす月が一画を領している時雨雲の動きに心を置く作者。夜更けの家路であろうか。

冬滝の微塵となりて落ちにけり 東京 坊城俊樹

夏の滝の姿には見られない凍つて行きつつある冬滝の姿に惹かれ立つ作者の感性。

女正月せずとも嬬天下かな 神戸 三村純也

家庭円満の秘訣を心得ている作者の本音をちらりと覗く楽しい句。しかし女正月には別の楽しみもあるのです。

白で来し綿虫青に変わり消ゆ 神戸 後藤比奈夫

こんな小さい虫にもこのような見方をされると何とお洒落であるうか。青空に呑み込まれた綿虫の行方。

人生に道草いくつ漱石忌 神戸 山田弘子

夏目漱石の忌日に寄せて、重なっていく作者の人生にもまた道草ありとのこと。

二上に薄き雲あり春立つ日 樞原 稲岡 長

いつも見て行く二上山の変化に立春の今日を置く。薄々と立つ雲に季節の推移を思う作者。